
ORANGE - オレンジ -

聖奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ORANGE オレンジ

【Nコード】

N7966C

【作者名】

聖奈

【あらすじ】

このお話は、青春ならでわの、不安で、だけど楽しい。そんな風景を描いた作品です。自分の過去を思い出しながら、気楽に見て頂ければ幸いです。

第一章

春というにはまだ早い。少し肌寒い季節に私は彼に恋をしました。

入学してから2日目。もちろん私はまだ全員の名前を覚えていない。

私… 斎藤優は高校生になり、今とても楽しくない日々を送っている。

なぜなら、今のクラスに3年2組の女子は私一人だから。

「セカンドスクールの実行委員、男女一人ずつ。誰か立候補してくれないかー？」

朝のホームルーム中。担任の武部が大きな声で叫んでいる。優は面倒くさそうに目を背け、顔を伏せた。

「はい！はい！俺、やりたい！」

イキナリ、大きな声で立ち上がり…手を挙げる一人の男子。

「おっ、浅野！よく言った！！」

また…あの子だ。

入学式からやたらウルサイ奴。

優は呆れた顔で彼を眺めていた。

周りの男子達は彼のテンションに押され…賑やかに騒ぎだす。

「よしっ男子は決まった。次、女子。誰かやりたい人いるかー？」

立候補してくれた人がいて、嬉しかったのだろうか？

武部は満面の笑みで女子に話掛ける。

普通に考えてしたい人とか…居るわけ無いじゃん。

優は、机にもたれた。

女子達は、武部の視界に入らぬよう…下を向いて座っている。

「…しょうがないなあ。。じゃあポイント絞るか。」

痺れを切らし、武部は溜め息をついた。

「…えーと、じゃあ、東中・西中・南中・北中の中で…東中！東中だった女子、手を挙げて！！」

…はあ！？本気で言ってるの！？

突然の言葉に、優は机から顔を上げた。

そして恐る恐る手を挙げる。

武部の提案に、生徒達は賑わっていく。

…優を含めた3つの手のひらは、目立たぬよう、ひっそりと挙げられていた。

「じゃあ、3年2組だった子。立って！」
はあ！？

優は目の前が真っ暗になった。

…面倒くさい事はしない主義なのに。

重たい腰をゆっくりと動かし、立ち上がる。

一斉に、周囲の視線が彼女に向けられた。「お！じゃあ 斎藤に決定。今日の放課後集会あるから。頼んだぞ！」

満足気に微笑んでくる武部。

…ついてない。今日の占い一位だったのに。。

はあ、中学校んときの友達とはクラスはぐれるし、面倒くさい実行委員までやらされるなんて、まじで最悪。

優は眉間にシワを寄せて腰をおろした。

「まじで！？めっちゃ最悪じゃんっ」

昼休み、優はそそくさと教室をぬけだし…5組へと向かった。

5組には、中学校時代仲の 良かった守谷夏樹と須永玲が居る。

「他人事だと思って！」

実行委員を任されたことをケラケラと笑う2人に、優はふてくされた表情を見せた。

「で、友達はできたの？」

口を尖らす彼女に、玲は心配そうに声を掛けた。

「…2組だったアツちゃんと、一緒に行動してるけど」

優は、物足りなさそうに呟いた。

「だめじゃん、こっちばかり来てたら」

夏樹は、呆れた顔で苦笑いをする。

「…だって」

キンコーンカーンコーン

優の言葉を遮るように、チャイムの音が鳴り響く。

「ほら、5時間目始まるよ。ダッシュで戻りな」

そう言って、玲は彼女の背中をポンと叩いた。

「帰りには、迎えに行くから！」

続けて、手をひらひらと振る夏樹。

捨てられた子犬のように、優は寂しそうに振り返りながら、ぽつりぽつりと重たい足を動かした。

…夏樹達はいいいじゃん。

私だけ、クラス離れてるのに。

優は、半分スネた気持ちで1組に戻るのだった。

「浅野と一緒にの実行委員とか、かなりいいじゃん！」

帰りのホームルーム中、前の席の麻美が話し掛けてきた。

「浅野？ああ、あの子？」

“かなりいいじゃん”って言われても、別に格好良いわけでもないし。優は賑やかに騒いでいる彼をチラッと横目で見ると

「ああ見えても、西中では人気あったんだよ！おもしろいし、可愛い系じゃん」

両腕を机の上に置いて、身を乗り出す彼女は、優の耳に囁いた。

「…ふうーん」

可愛いって言うか、小さいだけじゃん。

優は“興味が無い”と言わんばかりに…無表情で答えた。

「斎藤、行こう!」

ホームルームが終わると、浅野^{まみ}真心は真っ先に駆け付けてきた。

…なんでそんな張り切ってんの？

優は“面倒くさい実行委員の仕事”を今すぐにでも放棄したい思いで、ダルそうに立ち上がる。

「俺さあ、今日サッカー部入ろうと思ってたんだけど 間に合うかなあ」

独り言のように、隣でばやく彼。

…ほんとに小さいなあ、この子。

優は彼の姿を無言で見下ろしていた。

「斎藤って、3年のクラスから一人なの？」

張り切ってたわりには、真面目に話を聞くわけでもなく…彼は隣のクラスの男子や優に話し掛けてばかり。

「…うん」

気にしていることに触れられ、優は不機嫌な表情でそっけなく答える。

「いいなあ、めっちゃラッキーじゃん！」

彼は椅子にもたれかかり、優に笑い掛けた。

…はあ？

何こいつ、馬鹿にしてんの！？

彼の言葉に、優はムツとした。

「何がラッキーなの？」

そう言つて彼を睨み付ける。

「え…だつて知らない奴ばつかだと、新しいツレ増えるじゃん。違うクラスの人だとあんまり接点ないし」

馬鹿にしてるのか、それとも素で言っているのか？

どっちでもいいけど、彼のその時の言葉はあまりにもプラス思考すぎて…優は啞然とした。

「そっか…」

思わず彼の顔を見つめる。

「んじゃ、まずは握手」

屈託のない笑顔で、彼は右手を差し出してくる。

「え？」

突然、握手を求められ、優は意味がわからず戸惑った。

「今日から、俺ら友達な！」

そう言っただけで彼はせかすように右手を揺らした。

「ああ、うん」

今まで周りにいなかったタイプの彼に調子が狂ってしまう。
優は言われるまま右手を重ねた。

「俺、浅野真心！マミって呼んでなっ」

彼はニコツと微笑み、ぎゅっと手を握る。

「マミ？」

女の子みたいな名前に、優は興味を示した。

「うん。変わってんだろ。」

その時、優はふと気付いた。いつのまにか彼のペースに流されている。

入学してからの数日間、うちのクラスは真心を中心に回っていた。

でも、それは、彼がただ一人でうるさくしているからだと思っていた。

でも、そうじゃない。彼のもつ空気が、皆を明るくしている。

優は、麻美の言った言葉の意味を素直に受け入れる事ができた。

恋する気持ち

「6つのグループに分けるんで、くじ引きで決めます!」

あれから、毎日は忙しく過ぎていく。

優は、真心と実行委員の仕事をしているうちに、クラスの子とも仲良くなることができた。

彼の周りでは、常に笑い声が飛んでいる。

そして優もまた、以前からは考えられないほど積極的な行動を身につけていた。

「じゃあ、俺らが最後な。」

そう言つて、カラのティッシュの箱に入れたくじを引く彼。そして、優もくじを引く。

真心と一緒にのグループだったら…楽しいだろうなあ。

優は、最後に引いた藁半紙のくじに、密かな願いを込めた。

恐る恐るくじを開くと、書いてある数字は“5”。

周りに気付かれないように、さり気なく真心の手の中を覗く。

目に映った数字は“3”。

心の中で、がっかりとした気持ちが込み上げてくる。

「んじゃ、班ごとに飯盒炊きの役割決めて、今日はおわり！」

真心はくじをヒラヒラと振りながら、クラスメイト全員に大声で話し掛けた。

優は淋しい気持ちで自分の班に向かった。

すると、真心が声を掛けてくる。

「残念。一緒に無かったな！」

特に深い意味があるわけでもないが、彼の言葉で妙な嬉しさが込み上げてくる。

「…うん」

優は、彼に話し掛けられたことが嬉しかった。

「最近さあ、5組来なくなっただね。友達できた？」

下校途中、夏樹が優しく微笑みかけてくる。

「うん！結構皆と仲良くなったよ」

優は満面の笑みで頷いた。

「でも最近、実行委員の仕事で大変なんですよ？しんどくない？」

久々に何も無い日を迎え、優は夏樹と一緒に帰ることができた。

彼女は、面倒くさがり屋の優を心配する。

「ううん。まあ、楽しいし」

夏樹に指摘され、改めて気付く…面倒くさがり屋だった自分。

ここ最近、優は真心と一緒に仕事することが楽しくてたまらなかった。

密かに隠していた…胸の奥の気持ちを、夏樹に話そうか、話すまいか、迷いだす。

「何？もじもじして 気持ち悪い」

少し頬を赤らめ、照れる彼女に、夏樹は眉をひそめ問い掛けた。

「え？…へへっ」

口をフニフニと動かす優。

「本当に何？マジで気持ち悪いって」

今までに見たことのない態度に、夏樹は戸惑った。

すれと優は、夏樹の耳元に手を添え…小さな声で打ち明けた。

「…マジ？」

耳に入った言葉に、夏樹は口をポカンと開けた。

「マジです。」

優は、恥ずかしそうに目を伏せる。

「え、でも…背え小さくない？あいつでしょ？実行委員で一緒の…」

身長に不釣り合いを感じ、夏樹は何か言いたげな顔をする。

「背とかあんま関係なくない？」

少し自分でも思っていた問題を突かれ、優は声を上ずらせた。

「そっかあ、好きな人啊」

夏樹はニツコリと頬の力を緩めた。

「誰かに言ったりとかしちゃだめだからね！！」

「はいはい」

いつの間にか胸の奥で生まれていたもの…それは真心への恋する気持ち。

優は彼を好きになっていたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7966c/>

ORANGE - オレンジ -

2010年10月25日01時36分発行